

# 忘れられぬ私の先生方

——数藤斧三郎先生のこと——

山 崎 匡 輔

私が、第一高等学校（二高）に入学したのは、明治四十年のことです。当時官立の高等学校は全国で僅かに七校、同様に官立の大学も、東京、京都、福岡の三大学にすぎなかつた頃でした。それで、高等学校の入学試験は随分はげしく、試験は文部省で全国を統合して行われ、その成績によつて、それぞれ志望校の順に入学を許されると云うような制度でした。私も、郷里（群馬県前橋市）の中学を首席で卒業しながら、一度はまんまと失敗して一年浪人をし、前に述べたように、明治四十年に、ようやく目的を達したのでした。この一年の浪人生活は随分辛いものでもありましたが、今から想うと有意義でもありました。何よりも中学の首位卒業と云う思い上りが根こそぎ失われ、そうして謙虚な心で、ひたすら勉強したと云うことです。従つて、この一年の浪人生活が、私の内外両面に影響があつたことを否定することはできません。

とも角も、私はこうして、白線柏葉（柏葉は一高の校章）の

帽子をかぶつて、向陵（今の東大農学部）の学生となり、朴鹵の下駄を踏み鳴らして、本郷通りを濶歩することになりました。

一高に入学して、先づ第一に驚かされたことは、先生達が皆そろつて偉そうに見えたことでありました。校長は、当時の青年子女の憧れの的であつた農学博士文学博士の新渡戸稲造先生（新渡戸先生のこと）、後で書きたいと思つています）であり、夏目漱石先生は、その前年、既に去られたあとでありましたが、ドイツ語には有名な岩元禎先生、漢学の塩谷（温先生の父君）、安井、島田先生、国語には菊地（教頭）、今井先生、英語と図学には小島憲一先生、物理に数藤、友田、化学に菅波などの諸先生、いづれも一世の碩学揃い。その他、一々数えきれない程。助手の先生方まで、田舎の中学から出て来た私には、皆、偉そうに見えました。

そうした先生の中で、数藤先生は異彩を放つた存在でし

た。その異彩と云うのが、特別に目立つた人柄とはおよそ違つて、極めて地味な、静かな、物軟かな方でした。大きな声一つ出されるわけでもなく、道を歩かれるにも、道の端を、物思いに耽つてもいへるようには、足音もたてないようには歩かれるのでした。先生は数学を教えていられた。はじめ、久留米中学校で教鞭をとつていられたが、廿一歳の若さで、仙合の第二高等学校の正教授になられた。今の青年ならば未だ遊びたい盛りの年頃でした。先生を仙合に起用したのは、藤沢利喜太郎先生と山川健次郎先生でしたが、そこから、その知遇を受け、後に、一高の先生になられたのもその時、ちようと、また一高の校長になつていられた沢柳先生のお声がかりと聞いています。後にも書きますが、俳人としての先生が、五城と号されたのも、その仙合からのゆかりであります。あまり表面に立たない物静かな先生の人柄は、若い頃からの御病身のせいであつたことは確かです。

先生は、教室にはいつて来られると、例の低い声で、型の如く出席をとられ、余り生徒の顔も御覧にならないようにして、且々と講義を進められました。天井の方を見つめられるようにして、少し吃り口調ではあつたが、整然と自ら順序を工夫するようにして、決して教案にたよらない講義でした。先生は小柄で、顔も目も身長も悉くこじんまりとした、どこか引きしまつてゐる方でした。私達は、二部甲類と申しまし

て、全員工科志望のものでしたから、数学と云う学科は最重要の学科の一つでありました。従つて、先生からの宿題は、いつも三、四十題あざけられていました。宿題が半分位すむと、もう後の宿題が追いかけて来ていましたので、年中借金の督促を受けているようなものでした。それで、指名されると、いろいろ宿題をずべつたことを、頭を掻きながら云いわけをしますと、先生は皆までお聞きにならず、いつに交らぬい平静さで、それでは誰々さんと次の人に解答を指名されるのでした。さすがの遊び盛りのわれわれも、叱りつけられるより遙かにこれになりなりました。私は先生が上目づかいにしても精を出すようになりなりました。私は先生が上目づかいに目ばたきをしきりにしながら、講義されていられた姿を忘れることができませぬ。

先生の試験には、いつも一題だけ、大いに考えなければできないものが含まれていました。試験に失敗した時など、あとでお詫を申しあげると、もういい、試験のことは試験だけのことと、こともなげに言われるのが常でした。

先生は授業時間が終ると、よく運動場の端に立つていて、野球部の練習を見ていられた。別に競技に興味を持つと云う先生ではなかつたのですが、当時の一高野球部の練習は実に激しく、心魂を尽した練習振りでした。そうして、そう云う選手の中に、われわれのクラスの首席を占めたものもいたのです。暑い日も寒い日も、その練習を見守る一団の学生

達の中に、先生を見ない日がまれてあつたことは、何か先生の心に適うものが、練習そのものの中に在つたと思われました。

われわれは、何とはなしに、また何時ともなしに、われわれのクラス全体が先生に引き付けられて行きました。秋の日曜のよい日に、われわれ五六人で、突然、先生をお誘いして尾久に和船を漕ぎに行つたこともありませう。そうした時に、先生の御持参のお菓子や和船の中で食べた時の楽しさもなつかしいものです。

その中に先生の御郷里の鎮守の祭礼の夜など、お宅に招かれて御馳走になつたりして、知らず知らず、奥様にもお近づきになりました。

先生にはお子様がなく、奥様とお二人、それに女中の三人暮りでした。お宅は追分町三十番地の、とある横丁のどん詰りの右側の、門もない、三間程の小じんまりした平屋でした。庭は、自然そのままの菊の植込みや、紫陽花や山吹の株のあつたほか、梅の一株位の閑疎さ、それを竹垣で囲つた小さなものでした。この庭に面した八畳の間の縁側に向つて、小さな机が一基据付けてあるだけで、床の間も別に飾られては居らず、学者の書斎らしい本棚、本箱のいかめしいものなどは一つも見受けられませんでした。

この八畳の間で、その後私もよく毎月十三日夜に催された浩々洞の方々の法話を伺うことになりました。浩々洞は当時

曙町あたりにありまして、清沢滿之先生の流れをくむ、佐々木月樵、多田鼎、曉鳥敏、山辺習学など云う先生方が代りがわりにお出になつての真宗の法話でありました。法話が終ると、先生は法悦そのものを面に表わしながらも、その心からの喜びとお礼は只一言、「ありがとうございました」だけでした。浩々洞の方々も、先生には、ほんとうの敬意を払つていられるように見えました。私としては私の信仰はありながら、真宗の庶民性、凡夫こそが救の対象であると云う教義の偉大さに打たれました。そうした法席のある夜、嘆異鈔の一節「弥陀一劫の苦業も、これ親鸞一人のためなりけり」に及んだとき、同席されていた大賀一郎氏（今は蓮の実の博士として世界的に知られた学者、当時は未だ大学を出たての理学士であつた。同君は、その学生時代に先生のお宅に置いて頂いた人であり、内村鑑三先生のお弟子の一人）は、この「これ親鸞一人のためなりけり」の法話の中に含まれる深い信仰の境地に感激し、この上の雑話に耳を煩わしたくないと、頂いた法味を大切に抱きかかえるようにして、そそくさと帰つて行かれたことも思い出されます。

私の中学時代に高昌素之（マルクス資本論の翻譯者で、木下尚江等と共に社会主義運動を興し、最後には熱烈な国家神道を奉じながら病死した）君があつて、彼を中心として基督教の猛烈なりヴィヴルの嵐が校内を吹きまくつたことがありました。このグループは組合教会に属していました。彼より二年後輩であ

つた私も、この運動に巻き込まれ、胸中のもだえも霧消した  
思いに感激していましたが、次第に教会を中心とする信仰生  
活に空虚さを感じるようになり、一高に入学してから、友人  
のすすめに従つて、内村鑑三先生の著書によつて、はじめ  
本物の宗教を獲たように喜んでいました。それに、新渡戸先  
生による、カーライル、ゲーテなどの御講読によつて、若い  
私の心には、ともすれば西洋一辺倒の傾向が強められていた  
時でありました。それが、数藤先生のお宅の御法話によつて  
自分の衰れた信仰に何か深さを加えられるようにも思われ、  
同時に東洋思想の中にも、われわれ日本人の中にも、既に真  
の偉大な宗教の存在を知ることができました。

数藤先生の信仰遍歴も長いもののようにでしたが、私はこれ  
を詳かに知りません。大賀君が先生のお宅に御厄介になつて  
いた関係もあつて、先生も兩三回、角筈の内村先生の集りに  
出席されたことがあつたようです。その後、病氣静養に幾度  
か転地をなされましたが、明治三十九年頃の夏、沼津の転地  
先で、その頃の沼津中学校校長の落合寅平氏（後に宮崎中学、東  
京府立第五中学の校長になられた方で、今の都立新宿高校々長の  
実父）宅で多田鼎師の法席に列し、先生の信仰生活ははじめ  
て安住の地を得られたのです。ずつと後のことですが、先生  
と私が、先生のお宅の庭に立つていた時に、先生は私にこう  
申されました。山崎さん、基督教の方々は、社会事業の面  
実によく積極的にお働きになります。その点では仏教の方は

とてもかかないません。私も、実は内村先生の所にお伺ひした  
ことがあるのです。今はこうして真宗の信仰を頂くようにな  
りましたので、一度内村先生の所にお伺ひして、私の現在の  
信仰を御報告申し上げました時、内村先生は、そうかそうか  
と頷かれ、「真宗は小母おはさんのような宗教だね。」と仰言つた  
とお話し下さいました。兎角一宗の信仰の人が、排他的の言  
辞を遊びがちの世の中に、このお二人の会話を、私は今も繰  
返して思います。

その中に、私は屢々盲腸周囲炎の発作に悩まされ、絶対に  
食餌療法を必要とされましたが、一高の寄宿舎では、どうに  
もなりません。

そこで、私の友人の一人が先生のお宅に馳け付けて、山崎  
がこう云うことになつたので、先生のお宅でお世話下さ  
いませんかとお願ひして呉れました。それは全く友人の独断  
でのことで、もとより私はそれを知りませんでした。ところ  
が、先生と奥様とは私を引受けてやろうと云われました。こ  
れを聞いた友人は、真に文字通り雀躍こわどりして喜んで、私のと  
ころに走つて来ました。友人は、いきせききつていました。  
友人の鼻の頭には汗のたまが見えました。私は一瞬呼吸が止  
つたような思いがしましたが、次の瞬間には、もう先生御夫  
妻の御好意を有り難く頂こうと決心しました。先生のお宅も  
余りお広いこともありませので、先生のお宅の前にちよう  
ど有信館と云う下宿屋のあつたことを思い出し、早速そこに

部屋を求め、三度三度の食事を先生のお宅に伺つて、御夫妻と食膳を共にする光栄を得たのです。それは私の一高三年の時でした。それから後は、われわれのグループと先生のお宅との関係は、ますます深まつて行きました。其後も私は屢々病氣を繰り返しました。

そのような関係で、先生は私を二木謙三先生に御紹介下さいました。先生も常に病氣を抱えて居られたので、こと肉体の病氣に関しては、先生は全く二木先生を信頼され、全く二木先生委せの境地に立たれて居られました。それは信仰上の弥陀委せの御生活の態度と同様なものでした。私もこの不言の御教示に知らず知らず引きずられ、その後三、四年の間の多くの病氣に対しては、一方には先生御夫妻の並々ならぬ御看護を頂き、他方には、二木先生に対する絶対信頼の患者になり了りました。ここにお断りして置かなければならないことは、二木先生が普通の医師のように何等の報酬をも求めると云うことなしに、一個の貧書生を将来何か邦のために役立つようとしてのお心からの御親切であつたことは、その後、いろいろの機会によく判りました。

二木先生は、私はちやんと俸給を頂いて居る（当時、二木先生は市立駒込病院の副院長で、東大の講師を兼務して居られました）ので、その余暇を利用して、世の中のために尽したい。もし富を求めるなら、はじめから医学などは修めないで、相場師になつていたでしようと言われたことを記憶しています。

その後、私の大学入学試験の当時も、大学一年の時の腸チブスの時も、そうして、大学の卒業試験の時も、よく私は病氣をしたものですが、数藤先生の御夫妻と二木先生の並々ならぬ御親切によつて、今日の私ができ上つたことを忘れることができないのであります。

こうして、話は前後しますが、私の大学一年の頃、われわれグループの中で私ばかりが先生の特別な愛の御庇護の中にあることが問題となり、それを更に拡大しようとする議がグループの中で起りまして、二、三人して貸家探しをしました。そして、とうとう、西須賀町（浪津権現の南側の丘の上）に一軒の貸家を見付け、家賃から何まで家主と交渉して取りきめました。それは先生御夫妻には何等の御了解をも得ていなかった行動でした。今から考えると、なんぼ若気の至りとは云え、随分、乱暴至極と申すほかありません。早速、先生のお宅に行つて、奥様にことの次第を申し上げますと、さすがの奥様もびつくりなさいました。そこに先生が学校から帰つて来られました。あきれたと云う口調で申される奥様のお言葉を、先生はこともなげに、それは面白からうと言下に云つてのけられました。それを側で聞いて居たわれわれは、俄に元氣づきました。どの部屋を先生のもの、どこが食事室、どこがお座敷、どこがわれわれなどと、部屋割まできめて、早速次の日曜には、皆で押しかけて、お手伝して引越しまでしてしまいました。

追分町のお宅は先生には十二年も住み馴れた所なので、どこか先生のお人柄が滲み出ているようでもあつたので、われわれも何となく名残が惜まれてならなかつたのですから、先生御夫妻には、様々の御感懐が、おありになつたことと思われます。

このようにして、われわれの西須賀町の生活は、明治四十四年の九月から始められました。ことはわれわれのグループの企画ではあつたのですが、集つたもの達はむしろグループ外の人達でありました。それは、グループの人達にとつて少しの障りでもありませんで、先生を中心として、今迄のグループは非常な気安さで西須賀町に集つて来られたのであります。そうして實際の同宿者は、理科大学の山田幸五郎君、それに先生の甥の法学部学生中村君、清沢満之先生の遺子の中學生即往君、暁烏敏先生あけがらすの御息、それに宮崎中学をその年首席で卒業して出京してこられ、一高の法科に入学した平島敏夫君（終戦時の満鉄副總裁、現在日本送電勤務、そして当時府立五中校長に栄転された落合寅平さんの強い推薦によつた）と私とでありました。

それ迄、兎角御病身であられた先生は、こうした若者達を相手とされてから、あらゆる面で元氣潑刺となられました。それは無論二木博士と御相談の結果でもあつたでしょうが、毎朝四時の未だ明けやらない頃に起床され、冷水浴をされて、一里から一里半位散歩をされました。朝食の時、今朝どこそ

こから、どこそこ廻つた。どこそこの椿が大変美しかったなどと話をされました。色々の店家の中、豆腐屋が一番早起きであることなども伺つたりしました。また他力本願の真宗の最も忠実な先生でありながら、平島君の機縁によつて谷中の両忘庵に修禪の目的で宗活禪師につかれたこともありました。その時、同庵の執事が他力本願の信仰がきつと覆えされると思いますが、それでもよろしいかと問われた。

先生は、今迄の信仰が覆えされようが、されまいが、そう云うことは問うところではありません。しかし、自分の他力本願の信仰が禪宗と矛盾するものとは考えないと答えられたと云うことであります。先生にとつては、恐らく他力本願の信仰を強化するための、修業であつたのであつたことでしょう。先生の信念の強さの非凡さを思うものであります。參禪は長つずきはしませんでしたが、それは先生の健康と、当時先生が盛んに数学の論文に精を出されて居たために、その志を持続し得なかつたものでもありましたでしょう。しかし、その後も提唱の座には、よく列せられていたと云うことでした。

こうした先生の御元氣さは、一高の授業時間中にも現われて、先生が、だいぶ私達の頃よりは厳しくなつたと云うことで、これは、君達のせいであらうと、当時の一高の後輩達に言われたこともありました。

西須賀町宅での夕食の後で、先生の提案で、自分の読んだ

本の梗概を話し合うことになりました。ある人は忠君愛國の話ばかりを持つて来ましたが、先生の番になると、ドストイエウスキー、トルストイ、メーテルリンク、イブセン、オスカーワイルド、ツルゲネーフ等、みんな先生から手ほどきして頂きました。メーテルリンクの神秘的な表現に対しては、当時、われわれの幼稚な頭によく判らないこともありましたが、先生は、それに一々註訳まで加えて下さいました。その後四十年以上も経過した今日、先生のお言葉の意味が、やつと判りかけたような気がすることもあります。

先生は、前にも書きましたように、道を歩くのにも、片端を静かに音もなく歩かれると申しましたが、先生の靴は、ほんとうにいつも綺麗で、靴の踵の減り方も平でした。その頃われわれは当番をきめて、朝々みんなの靴磨きをしました。みんなの靴が泥だらけに汚れていても、先生の靴だけは、不思議と綺麗でした。靴磨きと云えば、ある寒い朝、私が靴を磨いている時、ちようど、朝の散歩から帰られた先生は、その朝、報恩講の行事に浅草の本願寺に参られて、未だ明けやらぬ本堂の暗がりや、蠟燭の光にちらちらと照し出された金蘭の法衣の行列の美しく壮嚴であつたことを家人に嬉しそうにして語らいながら、二階へと階段を登りかけていられた。その時、私は、つい口をむらし、祖師親鸞の一生は墨染の麻衣であつたものと申ししまいました。その時先生は登りかけた階段で一寸ふり返り、山崎さんも美しいものは

好きではありませんかと云われました。とたんに私は背中に冷水を浴びた思いをして、先生を見上げますと、先生はいつもの通りにこにこして平静そのもので、そのまま二階に上つてしまわれました。このことを、その後、私は何回も繰返して思い出しています。

ある時、皆して好きな花の話が出たことがありました。誰は桜、誰は菊など云い合つている時に、先生は私は牡丹が好きだと申されました、万事地味な先生が華やかな大きな牡丹を指されたのに驚いた顔をしている私に、先生は山崎さんは薔薇でしようと付け加えられました、実際私は、その時薔薇を心の中で思つて居ましたので、何やら恥しいような気がしました。

一面地味な先生の裏には、絢爛たる華やかさを蔵していられたのであります。こうした先生は、義太夫も好きであり、歌舞伎も好きでありました。私共が御厄介になつてからは、余りお出ではならなかつたようですが、本郷三丁目にあつた若竹の義太夫の席には、よく先生御夫妻をお見掛けしたと、その途の通の友人から聞いたことがあります。歌舞伎の方は伊原青々園と中学の同級生であつて特別の関係もおありのよう、時々私などが余り旧劇に無知なことがお笑い草になつたこともありました。伊原氏の書いたものによると、少年時代の先生は随分当時の文芸書を読まれ、ひそかに小説家になろうとする志望を抱いていたこともおありだつたと云うこと

であります。

先生が数学の先生でありながら、こうしたものを内に蔵して居られたので、早くから俳句に志され、子規の門下となられた関係もあつて、その後、ホトトギスに沢山句を出された。松根東洋城も、先生の句を、「情密じやうみつかにして格調の高いもの」として、明治の句界の巨星であると称えて居られます。

繰り返し教へて飽かぬ夜長かな

西の市に到りもつかず戻りけり

紫陽花や花より花に蜘蛛の糸

雑穀の埃にうとし菊の花

或日小鳥空を蔽うて渡りけり

胸病んで今年驚く寒さ哉

薬店りやくてんや寄席の帰りの冬の月

絹展べて牡丹に対す蘇小哉

狸汁蘆生が鍋に凍りたる

寒山が木兔なぶる礫かな

テールやノート人あらず春の風

嫩き蓮の浮葉や仏生会

年忘れただ此宵を笑ふべく

蘭の秋尊き御影拝しけり

橋一つ我れにかかれり秋の川

足袋頭巾われに妻ある念仏かな

(いずれも、東洋城・虚子の選句の中から)

私には、俳句のことはよく判らない。それでも、先生の御生活とお心とを多少とも知つて居る身には、ほんとうには判らないながら、判るような気がするのです。

先生のところには、われわれのグループがよく集つた。先生御夫妻は、それら集つて来るものを、みんな可愛がつて下さつた。それは一つには、先生にお子さんが無かつたことも由来したでしょう。同時にそれは一層集まるものに自由さを与えたからでもあります。そうして集つたものに、お汁粉の御馳走がよく出されました。先生は大変甘いものが好きで、藤村(本郷三丁目近くの有名なお菓子屋)の羊羹かんや、殊にお汁粉屋には実に詳しかつた。上野の水月、黒門町の何とか屋、それは、今の松坂屋の南隣、それに梅月、若松、日本橋の何とか屋と云う、白木屋の横のうまい物横町の汁粉屋、曰く田端の何屋、浅草の何屋と、ずい分詳しく、土曜日の夜など、一家一同、無論書生連中を引き連れて日本橋迄寒い星空の夜、遠征したこともありました。例の朝の散歩で、根津に一軒汁粉屋を発見したと云うので、先生が大得意になつて、皆を引き連れて押掛けて見ると、それが汁粉屋とは真赤な嘘で、こつちもあわてるし、むこうもあわて、そうそうに引きあげて来て、一同で腹を抱えて大笑いをしたこともありました。また例によつてお汁粉を作つて、家中腕に擦をかけて、いや腹に擦をかけて、汁粉の腕を重ねる中に、私は、汁粉は



すきはすきでしたが、一杯頂くともうげんになりして、せいぜい二杯以上は頂けないのです。

これが先生には大不平でした。汁粉の大好きな先生から見れば、これは遠慮と思うよりほかになかつたのでしよう。凡そ、人前とか、遠慮ぐらい先生の嫌いなことは、ないからです。弁解はなおのこと通りません。これには私もよわりました。

その頃、先生も屢々、数学の論文の編数を加えて居られました。そして工科の連中のほかに、若年ながら世に文名をさせている文科関係の連中も、先生をよく訪問せられました。その頃の先生の御生活は、外面誠に御幸福そのものでした。その頃、先生御夫妻の御養子の問題が起りました。そこで皆と相談の上、平嶋君の同郷のK君に白羽の矢を立てました。K君は重厚な人柄の人で、東大の薬学科の学生でした。

そうして時々西須賀町の宅にも訪問されて、一同から敬愛されてきました。われわれからK君はいかがですかと申し上げると、先生御夫妻は非常にお喜びの御様子ではありましたが、それでは勿体なさすぎる、また余り贅沢ですとおつしやられました。しかし既に先生御夫妻のお心が判つたので、K君にその内意を聞いて見ました。K君はK君で、自分が先生のような立派な方の名跡を継ぐなどは、あまり身の程しらずで勿体なさすぎると、なかなか承知の返事してくれませんでした。が、とうとう、先生の方で、Kでもよいと仰せられ

るならと云う返事を得たので、早速それを先生の方に御伝えしました。先生のお喜びは勿論たいへんなものでした。しかし、K君のように殆んどでき上つた人を迎えること云うことは御夫妻にとつて何とも気に済まされぬものがあつたのでしよう。それで、奥様とも御相談を重ねられたものと見え、その後、まもなく先生から、実は家内とも相談の上、身内の者でこんど、郷里の中学を卒業するものがあるので、それも次男ですから、それを貰い受けた方が私共には相応と考えるのです。実は、それも考えただけで、未だ何にも交渉を見て見ただけではないので、今のところ、海のものとも山のものとも判らないのです。ですが、これから掛け合つて見るのに、K君の話をそのままにして、両天秤をかけることは、まことに気が済まないから、どうか、K君には心から感謝して居るが、この旨、よくお伝え願つて、一応、K君との話を打切つて貰いたいとのことでした。

私は、このような問題に、強いて両天秤をかけないと云う先生の毅然たる御態度に、ひどく打たれました。早速K君を訪れて、先生のお言葉を伝えました。しかし、先生のお言葉はどうあろうと、先生のお身内との話は未だその端緒もついていないのであるから、これは私からお願いで、甚だ勝手であり、君を侮辱することにもなつて、何とも相済まないことですが、若し、先生のお身内の話が成り立たなかつた場合には、再び君の考慮を煩わすことを許して貰えないかと申し

出しました。K君はにこにこして、先生のお身内の話が成り立てば、こんな嬉しいことはない、自分としても肩の重荷が降される思いであること。そして、君の心配もあることであるから、万一の場合は、自分もお引受けすると云うことでした。私は、K君への先生の御伝言を果したことは、先生に報告をして置きましたが、後に付け加えた条件だけは深く自分の胸の裡に秘めて置きました。御年配の先生が、こうした純真な行動をとられ、若年の一学生であつた私が、ああした俗的な考を持つたことを今省みて、ほんとうに恥かしく思うのです。

幸にして先生の御養子問題は、円満に解決し、御親戚の村上家から鉄臣君(大学卒業后、内務省の官吏となり、岐阜、埼玉の縣知事を歴任し、終戦後バーチとなり、今は福島県正行寺で仏道にいそんで居る)がまかりました。その時の先生御夫妻のお喜びは、ほんとうに譬えるにもお姿でありました。われわれのグループは悉く招かれて、一々御紹介に預り、そうして、その御養子をも、われわれグループの一員としてまた弟として交友を結ばしたいと願われる先生でありました。

来て見ればさほどでもなし富士の山

と云う川柳があります。私達は、親しく先生のお宅に寄食して、ほんとうに寢食を共にして、この川柳とは反対にますます先生の人格の高さを、つくづくと感じました。この感じはわれわれグループの者達は無論、先生のお宅に寄食したもの

誰一人例外なく持つたものであります。

先生の御養子がきまつて出京されて間もなく、私は、私の死んだ親友の一家の求めに応じて、その友人の家に移り住むようになりました。それは大正四年の春のことでした。

その春の半頃(なつば)からと記憶しますが、先生は今迄の御元気の絶頂から、にわかに病床の人となられました。そうして段々と衰弱を加えて行きました。これが遂に先生の死の床となつてしまつたのです。考えて見れば、先生は未だ数え年四十五歳の若さであつたのです。

床の中に明け暮れされるようになってから、先生は和歌を作られるようになられました。和歌の方が、字数が多いだけに、一層の自由さがあると申されていきました。御病氣になられてからも、色々のお見舞客が見えられました。そうした中に、少しでも俗気紛々とも云うような客の帰つた後の、お疲れはひどく、御機嫌も悪くなりましたが、また思いも設けないうい好もしい方の訪問には、非常によろこばれ、幾度もくりかえして、その時の話をされました。安倍能成氏と岩波茂雄氏がグロキシニアの花を携えて訪れられたことなども、後者の例であります。

その中に、御養子鉄臣君が、見事に一回で一高に入学された時などは、われわれグループは皆招集され、御病床を囲んで、華やかな談笑の一晚を送りました。

その年は、殊に暑さの酷しい夏でした。衰弱は、毎日に加

つて行ききました。それでも先生は、骨と皮ばかりになつた腕をさし伸ばして、枕下から歌の稿を取りだしては、近作を見せて下さいました。

薄ゆかりグロキシニアの花提げてまれ人來ませり病の床に

紫の袋の口の紐とけてグロキシニアは咲き出でにけり

二つ咲くグロキシニアの紫の日々にうする見れば悲し

も

股の肉しげそりと落ちて頼りなくなるめる皮膚ひはわれとし

もあらず

妻叱る隣人のこゑ垣越に心さびしく聞き居るわれは

笑ひつゝ通る人ごゑ聞きながら心妬ましくひとり臥りぬ

愚かなる問に答ふる苦しさに堪へてもあるか寂しきここ

ろ

病牀に打ちて殺しし蠅いくつ糸屑とともに掃かれけるか

な

病みこもる雨夜さびしみ妹いと二人お染久松の歌をうたへ

り

事もなげに人のいへるは腹だたし医師いしがいへば心和こころなむに

先生の和歌はずい分沢山あつて、それらを一々御紹介した

いとも思うが、紙数にも自ら制限があることだから、この位

に止めて置きましょう。先生の御病気が暑中休暇を控えたの

で、自然御病床も淋しいこともあつた。大正四年八月二十一

日の朝、先生は遂に永遠の眠りにつかれたのであります。越えて同月二十四日、駒込の真洋寺で葬儀が行われました。

### 追記

私が、今迄書き記したことは、私と云う輩たぐひの髓すゑから見ただけであつて、決して先生の伝記ではありません。若し、先生の伝記を御覧になりたい方がおありでしたら、私の手もとに「数藤斧三郎君」(数藤斧三郎君遺稿出版会の刊行になるもの)があります。それを御覧になれば、先生の御人柄を更によくお判りが願えると思ひます。私の記したことは、謂わば、内側から見た先生の御行状とでも申すべきでしょう。

先生の風貌は、先生が逝かれた後で、私達から、先生の御性行を詳かに聞きとられた中村藤ふじ氏の肖像によく写し出されています。それは、今、東大教養学部の図書館に蔵されていますことを、御参考のために書き加えて置きます。